

スキマタイムズ

もっとお互いを理解するための場や時間を

日本自立生活センター自立支援事業所 2016年12月29日発行 第69号

Greetings of the Season and Best Wishes for the New Year

2016年もいよいよ大詰め。ドラマなどのテレビ番組もとにかく最終回が多く、年末特集というものもただひたすら騒がしく自己満足の内容が多いように感じます。純粋にスポーツの祭典をめざした52年前の東京オリンピックの時と違い、「経済効果やメダルの数」だけを狙ったような2020年のオリンピックも、庶民感覚とはおおよそかけ離れた駆け引きと騙しあいのものでしかないように見受けられます。

クリスマスを目前にして、新潟の糸魚川では強風にあおられて大火災が発生しました。40年近く前、山形県酒田市でも同様の火災で街並みが一変したのを見聞きしている私としては、この寒空に焼け出された方々の状況を思うと、障害者が大量に殺された相模原の事件や、熊本の地震災害などの命の重さとも重なり、私たちに何ができるかを繰り返し問われる年であったように思います。

私たち日本自立生活センター自立支援事業所は、「地域生活の獲得」を基本としてきております。先日、J C I L全体で合同忘年会が開催されました、その乾杯のあいさつは、次のようなものでした。「今年も暮れようとしています。今年ぼくはついに夢を叶えました。来年はもっと夢をかなえたいと思います。皆さんも夢を叶えてください。」挨拶をした彼は、重度の脳性まひがあり、施設での生活を長年送る中で10年くらい前から地域での暮らしを希望していました。その彼と、どうすれば地域で暮らせるかをJ C I L全体で考え、みんなでさまざまなことに取り組んで、今年、ようやく地域生活を実現することができたのです。事業所としてもとても喜ばしいことです。

一方、障害者の生活を支える介助者は、結婚や出産などのお祝い事が多かった年でもありました。今年は、事業所立ち上げから13年がたち、その長い年月の間のそれぞれの変化を見ることができました。

確実に障害者の地域生活が推進されているいま、私たち事業所の存在価値がますます高くなってきているのではないのでしょうか？

事業所全体、J C I L全体で、障害者、介助者、共に生きやすい社会を目指して参りたいと思います。

今年1年、本当にありがとうございました。

みなさま、よいお年をお迎えください。

理事長 矢吹 文敏



日本自立生活センター自立支援事業所 編集担当:横川

TEL:075-682-7950 E-mail:jcil-kyoto@jcil.jp URL:<http://www.jcil.jp/zigyosho/index.html>

12月から職員が1名増えました。
さっそく紹介したいと思います。
どうぞよろしくお願いいたします。

職員自己紹介

- ① なまえ ② JCIL との関わりはいつから？
③ きっかけは？ ④ どんな仕事をしていますか？
⑤ A:大切にしていること B:これからしたいこと

- ① 松本 知克 (まつもと ともかつ)
② 3年前くらい
③ 林君の紹介
④ 多分、ヘルパー？
土田さんと何か作ってます、多分。
⑤ A:10代のトキメキを大切に
B:楽しく仕事が出来たらいい



居場所づくり勉強会 第45弾報告 ～障害を持つ人の災害時の避難について考えよう～

大災害が起きたら、誰とどうやってどこへ避難しますか？ 2013年の9月には京都でも豪雨災害がありました。地震もいつ、どこにいるときに起きるかわかりません。自宅にいるときとは限らず、外出しているときや、仕事中、家族と別行動をしているときの可能性もあります。

今回お話をしてくださった鈴木絹江さんは、福島でおきた原発事故によって、事業所の利用者や介助者とともに新潟へ避難をされました。そのときはどのくらいの間避難生活をするようになるかもわからない状況でした。個人としての思いと、事業所の代表者としての責任感の入り混じるなかで、その決断をなさいました。一緒に避難した人、しなかった人、それぞれの事情と思いもあります。いずれにしても自分たちで情報をあつめて判断する必要がありますがありました。いざというときにどこからどのように情報を得るのかは大きな課題だと思いました。

障害者は、地域の学校の体育館などの一時避難場所では長期滞在ができない場合が多くあります。東日本大震災や熊本地震では、「福祉避難所」とされる場所はほとんどが使えませんでした。鈴木さんは、少し離れた場所のホテルや旅館などで滞在したほうが、落ち着いて先のことを考えられる場合もあるとおっしゃっていました。ただし、その場合は介助をどうするかが問題となります。慣れた介助者が一緒に行けるかどうかかわからないなかで決断を迫られます。参加者の一人は、「障害者の多くはいつも我慢する傾向があり、自分のことよりも他の人を優先してしまいやすい。いざというとき自分を大事にできるかということが問われているのだと感じた」と言っていました。介助者のほうも、何を優先してどう動くのかの判断を自分で決めなければなりません。一人が助けられる人数はそれほど多くはなく、思いがあっても駆けつけられるかどうかともわかりません。震災のときにすぐ駆けつけられなかったために、ずっと悔やんでいるという介助者の話はとても身につまされました。鈴木さんがくださった「とにかく近い方を助けよう」というヒントには考えさせられました。

この勉強会ではまとめや答えがでたわけではありません。いざというときに自分はどうするのか、ということについて「正しい答え」はありません。人に決めてもらうこともできないのです。このような勉強会をまたやろうという声がすでにありました。継続的に考える機会をつくっていくことが大事だと思いました。(横川)

こころとからだをすっきり！ヨガタイム

ヨガで自分の身体と向き合ってみませんか？ヨガの目的はきれいなポーズをとることではありません。その日の身体がどんなふうにか動くか動かないか、意識を自分に向ける時間です。呼吸が深くなり、肩こり、腰痛、疲労感もやわらぎます。もちろん腰痛予防にもいいですよ！ぜひ参加してみてください♪ 講師は石田久美さんです。

★ヨガ:全身をうごかすヨガ

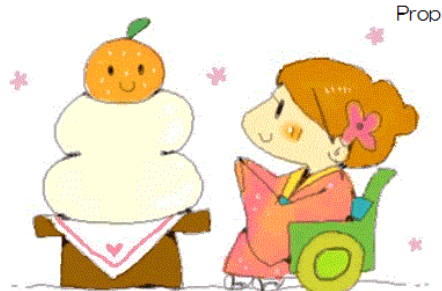
日時:1月23日(月)

17:00-18:15 (OPEN16:45)

場所:油小路事務所2F

持ち物:動きやすい服装・タオル・飲み物

参加費:無料



*このヨガクラスは、JCIL自立支援事業所の利用者と家族・介助者を対象にしています。

総合支援法に変わったよ！ で、それで？Part57

自立生活満喫中のリツコさん
でもあんまり難しい話は苦手…



ほんま。もう一年たつのかあ、と思う。
もうすぐ年越して実感があんまりないわあ。

やっぱり、うちらにとっては、相模原の事件が一番
衝撃だったかなあ。

うん。うちもうまく言えへんけど、なんかしんどい気
持ちがある。自分が殺されてたのかもしれない。
そやし、殺されるかもしれない、って、感じてしまう。

そうやったね。差別をなくそうという法律が
できたのに、あんな事件が起きてしもた。

うん。差別をなくしていくこと。その根っこには、
分けない！排除しない！というのがあると思う。
けど、施設も根強くあるし、学校教育でも分けら
れることが多いしな〜。

そやんなあ。地道な活動、根強くやっていかないとね。
けど、ヘルパー不足だったりして、けっこう毎日がア
ップアップだったりもする。

うん。うん。出産や結婚、けっこう多かった気がする。

ああ。あの方やねー。ほんま大変やったよね。
めげてしまうこと何度もあったけど、なんとか持ち直
して、夢をかなえるという気持ちを持ち続けはった。

そやんな！来年は、もっとよい一年にしよー！

障害者制度改革について
勉強中のタクオさん
小難しいこともやさしく(?) 解説



もう年末だね！あっという間に、一年がたつねー。

今年はどうな年だったかなあ。

ほんとにそうだね。障害者が命を狙われやすい存在だと、ま
ごまごと浮き彫りにされた事件だった。事件後、体調を崩し
たり、いいようのない不安に包まれてる人も多いと思う。

ほんとに。みんなの中に、大きな傷をつくった事件だったね。
でも、一方で、今年の4月には差別解消法が施行されている。
国や社会をあげて障害者差別をなくしていこう、という動き
がはじまった年でもあるんだ。

そうやね。やっぱり、根深い障害者差別って、あるんだよね。
確かに、自立生活して社会的に活動する人も増えてきたけど、
一方で、施設入所で、社会から忘れられてしまっている人もた
くさんいる。そのことは大きな大きな問題だよな。

本当に「共に生きる」社会を目指すために、地道な活動が、
やっぱりとても大事だよな。施設を残したまま、あるいは
分離教育を残したまま、きれいごとだけで、共生社会を目
指す、とか言ってほしくない。

うん。毎日を地域で生きぬいていくこと、そのことだけで
も、なかなか大変なことあるよね。けど、今年ハマりだ
おめでたいこともけっこうあったね。

多かったねー。新しい命に出会えることは、うれしいよね。
あと、10年くらいかけて、地域自立生活という夢を実現
した方もおられた。

うんうん。あきらめずにがんばったこと。仲間の支えがあ
ったこと、とても大事だった。日々の活動、あきらめてし
まいたくなることもあるかもしれないけど、やっぱり力をあ
わせて、よりよい社会を目指してがんばっていこう！

演

「海外生活 人生のチャンス」

ケネディ駐日大使は「に笑ったとき」と表現し生や留學生の約100

「障害者差別ない社会を」



①駅や銀行前に設置された柵のため利用できない現状を訴えるため登壇する電動車椅子利用者の山崎さん(京都市南区) ②京都市内の駅前で山崎さんは通れなかった(2015年7月)

切実体験、改善例報告も

「障害者権利条約の批准と完全実施を目指す京都実行委員会」が主催し、今年で4回目、約100人が参加した。同委員会女性部会は、旧優生保護法に基づき強制不妊手術を受けさせられた人が府内で男女89人いたことを報告した。全員の桜田朋子さん(72)「京都市北区」は40年前、第一子の妊娠

が分かったとき、視覚障害を理由に医師から「遺伝してはいけないので、今のうちに」と中絶を勧められた経験を語り、「当然、出産を選んだが、今でも医師の言葉は許せない。障害があっても自由に安心して出産できる社会であってほしい」と訴えた。昨年春に施行された障害者差別

南区で「デザインフォーラム」

障害者差別のない社会を目指す「共に安心して暮らせる京都デザインフォーラム」が17日、京都市南区の京都テルサで開かれた。障害のある人たちが出産や生活の中で体験した差別を明かし、解消への方策を探った。

別解消に向けた府条例について、府障害者支援課が、昨年度窓口にあった相談63件の概要を説明。「難病の女性に男性ヘルパーが派遣される」「車椅子での入店を飲食店に拒否された」などの相談があったとした。これに対し、電動車椅子を利用する山崎信一さんが、京都市内の銀行や駅の前に駐輪防止の柵が設けられ、通過できない事例を報告。府の窓口を通じて申し入れたところ改善されたとし、「条例ができて、ほくたちらず障害者は言いやすくなった。条例を使っていきましょう」と、会場に呼び掛けた。(上口祐也)

12月17日に開催された「第4回共に安心して暮らせる京都デザインフォーラム」について、18日の京都新聞朝刊の市民版に掲載されました！当事者、行政、企業、女性、さまざまな立場の発表があり、とても充実したフォーラムになりました☆

まず、明石市の先進的な取組状況を明石市障害者施策担当課長の金政玉さんにお話してもらいました。明石市では、障害のある人への合理的配慮の提供を、市が支援するという姿勢を全面に出しておられ、助成金制度もつくられています。現実的で実効性のある方策を検討しておられることがよくわかりました。

次に、京都の事例として、JCILの山崎さんと高橋さんが、銀行や駅にあるP字柵を撤去してもらおうよう相談して、改善された事例報告されました。また、ピープルファースト京都の松田さんと渡邊さんは、京都市の交通公園のゴーカート乗車拒否事件とその後の対応について報告しました。

そして、京都府障害者支援課の南孝徳課長から、昨年度の京都における相談実績の説明がありました。昨年度の実績は前日の16日に発表されたばかりです。こちらのリンクからも読むことができます。大事な資料ですので、ぜひ目を通してみてください。

<http://www.pref.kyoto.jp/shog.../documents/27joureihokoku.pdf>

また、企業の視点として、(有)山田木工所の山田正志専務より、障害者雇用を試行錯誤しながらすすめておられている状況についてお話していただきました。

最後に、「強制不妊手術は京都でも行われていた」と題して、女性部会から報告がありました。女性部会の活動報告とともに、実際に優生保護法下で行われた強制不妊手術の資料について具体的に発表されました。

このように、行政、当事者、企業のさまざまな取り組みを共有できる場はとても貴重です。お互いにとっても刺激になり、参加者のみなさんにも考えてもらえるきっかけになったのではないのでしょうか。

会場では、クリスマスにちなんで、星のカードを配り、赤い星には「差別事例(困った事例)」、黄色い星には「好事例(してもらってよかった事例)」を書いて、モミの木に飾るということもしました。自分の周りにある差別を言葉にして表に出すこと、またよかったことを共有して広めることの両方が大事です。これからもみんなで、安心して暮らせる京都をデザインしていきたいです。

